

## パネルディスカッション座長のまとめ

三重大学 耳鼻咽喉科

坂倉 康夫

ネブライザー療法は慢性副鼻腔炎の保存的療法の一手段として最も用いられることの多い治療法である。しかしながら、種々の理由で慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法の効果にはやや疑問があるとする耳鼻咽喉科医も決して少なくはない。このことは極めて高いネブライザー療法の普及率を考えると極めて矛盾したものである。

それにはネブライザー療法が十分な基礎的、臨床的効果の検討がなされないままに普及したという歴史的背景がある。

さらに、ネブライザー療法の入院外処置に占める比率とその保険請求点数構成比、またネブライザー療法点数の全処置点数に対する比率、ネブライザー療法1回分の薬剤価額などは年々増加の傾向があり、われわれ耳鼻咽喉科医にとっても、医療経済面でも重要な比重を占める存在となってきた。

このような諸問題点をふまえて中野雄一会長はこのパネルディスカッションを企画された。本パネルの第一部では慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法を取り巻く周辺の問題を取り上げた。

ネブライザー機器について佐藤は今回新たに施行したアンケート調査で関心や疑問の多い①機器の滅菌、②ノーズピースなどの改善、③薬液のアンプル化などについて解説した。椿は抗生物質について①起炎菌と抗菌スペクトル②薬剤濃度と安全性から③セファロスポリン、ペニシリン、アミノグリコシド、ホスホマイシン、キノロンを推奨した。北嶋はネブライザー療法にかかわる社会保険の問題を歴史的に分析し、ネブライザー療法を現状の保健医療にどのように対処させるかに大きな示唆をあたえた。

第2部ではネブライザー療法の臨床使用の検討である。

山岸と横田はそれぞれ上顎洞篩骨洞根本手術後にネブライザー療法を行い、術後上顎洞内細菌発育を抑制する高濃度の抗生物質が上顎洞に到達することを報告した。これらにより副鼻腔炎手術後の抗生物質の上顎洞にネブライザー療法が有効な術後療法の一つであることが明らかとなった。鼻腔と上顎洞の交通路が確保されている術後の状態ではこの結果は当然のことではあるが、ネブライザー療法確立のためにはこのような基礎的事実の蓄積が必要であろう。

北南は鼻茸切除後にネブライザーで抗生物質あるいは抗生物質とステロイドを投与した後療法の効果の比較について報告した。

本パネルでは保険医療におけるネブライザー療法の将来に対する耳鼻咽喉科医の危機感が底流にあり、ネブライザー療法の確立のために一層の基礎的、臨床的研究の必要性が痛感されるなど誠に有意義なパネルであった。

最後に演者を代表して本パネルディスカッションに発表の機会をお与え頂いた第15回日本医用エアロゾル研究会中野雄一会長に深甚な感謝の意を捧げます。